

く聴いた。バッハやモーツアルトではもともと無理と思われたが、しかしそのショーマンからも、私の求める癒やは得られなかつた。それは、沈んだ心が何も受け付けなかつたからではない。次第に、この種の音楽に慰撫効果を期待するのをやめるようになった（年とともにおめでたくなつて、そもそも悩みらしい悩みがなくなつたせいでもあろう）。

他方、漫才やお笑い芸に接し、達者な芸で楽しませてもらうと、爽快感とともに、心が軽くなる半面、バッハやベートーベンを聴いたときのような充実感が残ることが少ないのであるらしい。ここでは、前者を芸術、後者を娯楽と分けて考えることで、美学の立場から、それぞれとのつきあい方に含まれるものを分析してみたい。それを通じて、読者が娯楽や芸術とのほどをはっきりと見分けられるといふのが、私は娯楽を価値の低いもの、芸術をすばらしいものと言いたいのではない。価値の点で両者を同等と見た上で、その違いを明らかにすることに徹するつもりだ。

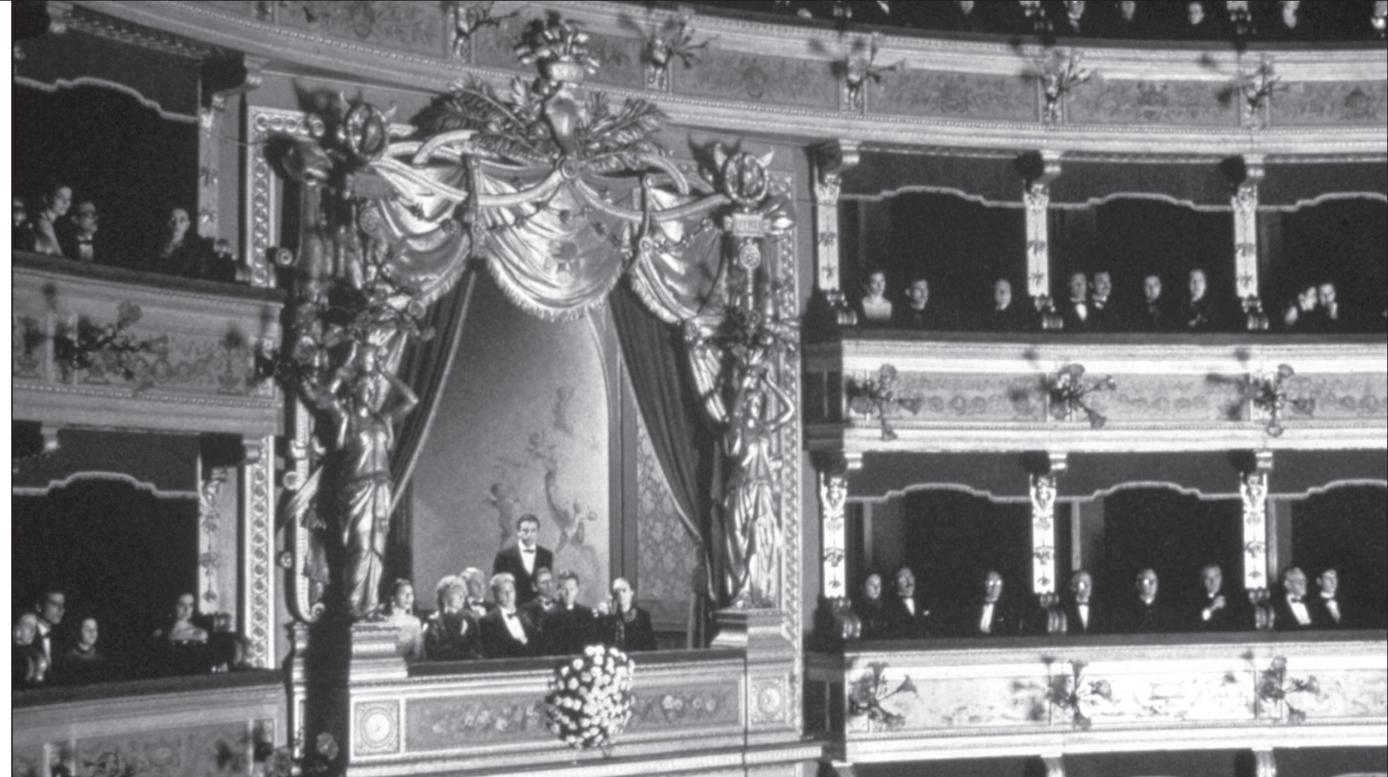
彼はそれに対して、芸術に似て非なるものの一種に娯楽を数える。それは芸術と違い、何を作るかが予め明確だ。一例として（若い読者が存じか、いささか心許ないが）テレビ番組『水

## 娯楽と芸術

二〇世紀に活躍した英国の哲学者コリングウッド（R.G. Collingwood）は著書『芸術の諸原理』（The Principles of Art）（一九三八）の中で、明快な芸術観を説いている。それによれば、芸術とは、芸術家の側から見れば、心の中にモヤモヤと何か表現したいことがあるのだが、それが何であるかは自分でもわからず、試行錯誤の末に表現できて初めて、これだつたのかと意識することができる、そのようなものだ。彼はそれを、言語と同じであると言う。自分の漠然とした感じに、「肩こり」「せつなさ」のような言葉を与えて初めて、その実体をつかんだ気がするという我々の身近な体験と相似形だと言うのだ。私の理解を付け加えるなら、芸術の受け手にも同じようなことが言えるはずだ。つまり、それをこそ慰撫のように、予め期待する効果が得られればいいというのではなく、自分のとらえ得たものよりも奥があると感じ、それをとらえたいと思うということだ。

戸黄門』を考えてみよう。これには決まって悪役が登場する。たとえば弱い民を虐げて私腹を肥やす悪代官だ。番組前半ではその悪辣ぶりと善良な民の苦しみを描き、前者には怒り、後者には同情の気持ちを、見る者に引き起こす。事情を聞いた黄門一行が番組後半で解決に乗り出し、最後にお待ちかねの「この紋所が目に入らぬか」で悪党がひれ伏す。そのとき、見る者における悪代官への怒りと民への同情は、もろとも跡形もなく解消し、見る者はスカッとする。これが世に言う「カタルシス」だ。「世に言う」と言うのは、これが、アリストテレスが『詩学』で言う「カタルシス」と同じものであると、私は考へないからだ。それはともかく、この番組で、見る者の中に何を作り出すかは、すみずみまで明確で、見る者もそれを期待している（八時四〇分だから、そろそろ代官所に乗り込むぞという期待もその内だ）。怒り、同情、そしてその解消による爽快感、さらにはそこからもたらされる憂いの軽減。これが娯楽の効果だ。

ここで娯楽と芸術それぞれの負の面についても触れておこう。娯楽は人に心の武装解除を求める。私は騙されるのではないかという警戒を娯楽に向けるのは、野暮だ。その中で、抵抗のない、口当たりのよい思想は容易に人々の心に



『ゴッドファーザーPART III』のクライマックスである劇場シーン。華やかな装飾が施されたこの箱の中で殺害のボリフォニーが奏でられる。  
©Paramount/Courtesy Everett Collection/amanaimages

# 娯楽か芸術か

津上英輔

(美学者)

映画や音楽において娯楽と芸術の違いは何だろう。  
美学者が英国の哲学者コリングウッドの理論をもとに、  
『ゴッドファーザーPART III』が芸術と呼べる理由を解き明かす。

『ゴッドファーザーPART III』はゴッドファーザー・シリーズの第三作として、第二作から一六年を経た一九九〇年に公開された。内容的にも前二作の後日譚と言ってよいだろう。事実、公開三十周年の二〇二〇年、『ゴッドファーザー（最終章）』マイケル・コレオーネの最期』のタイトルでリカット版が出たが、「最終章」と訳された原語は「コード（coda）」だ（小文では一九九〇年版を扱う）。

さて、ゴッドファーザー全三作は、「～映画」とジャンルづけするのが難しい（それは小文の主題とも関わる）。しかし、あえて言えば、ギヤング映画とするのが最も当たっているだろう。事実、話はアメリカのマフィアにおける殺しや暴力、犯罪をめぐるものである。そして、総じてギヤング映画とは、日本のヤクザ映画や時代劇と同様、娯楽映画に属するものと思われているだろう。しかし私は、『PART III』は、娯楽と見るより、芸術と見てこそ、そのよさをよりよくあじわえると考える。では娯楽と芸術には、どのような違いがあるのだろうか。

若いころ、心が沈んだとき、ふだん聴いて喜びを感じているクラシック音楽に慰めを求めることがあった。ショーマンの『詩人の恋』をよくあじわえると考える。では娯楽と芸術には、どのような違いがあるのだろうか。